遠い朝

田中　博・作
鈴木　正・絵

遠い朝

田中　博・作
鈴木　正・絵

講談社

913　田中 博

遠い朝

田中 博・作

講談社　1971（昭和46年）

234p　21.5cm（児童文学創作シリーズ）

小学上級から

遠　い　朝

昭和46年2月28日　第1刷発行
昭和47年5月20日　第2刷発行

作　者　田中　博

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112

電話　東京 03（945）1111（大代表）

振替　東京3930

印刷所　共同印刷株式会社

製本所　有限会社　大光堂

定　価　520円

© 講談社 1971 printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-188687-2253(0)

もくじ

開戦の夜……5
入学試験……22
四弾命中……40
よそ者……56
戦争の勝敗……68
野外教練……72
人魂……84
落第花……112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

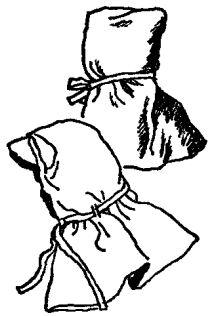
女学校……122
まがりかど……142
動員令……148
血書嘆願……160
そらまめの花……172
再会……186
黒い太陽……208
あとがき……232

装本
さしえ
鈴木正

開戦の夜

昭和十六年十二月八日――。

もう日はとっぷりとくれていた。ふだんなら、ぽつんぽつんとではあるけれど、街燈などがともって、そう暗い通りでもないのだが、きょうばかりはどの家もあかりをかくして、ひっそりとしずまりかえっていた。カラカラと音たてて街路樹の落ち葉が舞った。日ごろとはちがうはりつめたひややかな空気を、子ども心にも敏感に感じとりながら、信行たち三人は、人通りのたえたじゃり道をだまりがちにあるいた。



進学のための補習授業のつかれと、多分に空腹のせいもあったが、それいじょうに、三人はめいめいの考えにしずんでいた。

信行は、六年三組担任の坂田先生のことばを反芻していた。

「・・・・本日未明、わが大日本帝国は、米国および英国にたいして、戦争状態に突入した。太平洋の各

地で、日本軍はいっせいに攻撃を開始し、かっかくたる戦果をあげつつある。いままで、米国や英国は日本を圧迫しつづけ、ABCD包囲陣なるものをつくり、日本を孤立させようとした。とうとうかんにんぶくろのおが切れたのである。

だが、これからの戦争は、そうらくなものではあるまい。戦地にいっている兵隊さんだけでなく、銃後にいる諸君もがんばらねばならぬのだ。わがままはゆるされぬ。わがままは敵だ。男であれば、一日でも早くたくましく大きくなって、銃を持って戦わねばならぬ。たとえ女であっても、戦争遂行に協力する方法は山ほどあるのだ・・・・。」

坂田先生のことばは緊張にふるえていた。

「ぼくも、いつなんどき戦地におもむかねばならないやもしれぬ。その日がきたら、もちろんよろこんで国の大事にはせさんずる覚悟だ。村松美佐さんのおとうさんは部隊長として、いまごろはまっさきかけて敵陣にきりこまれているにちがいない。関一夫君のおとうさんは、もう米兵の十人ぐらいたたっきっておられることだろう。」

坂田先生の視線は信行にいったんとまり、きゅうにぷいとはなれてほかにうつった。

信行は、そのとき胸がずきんとした。じぶんの父親は兵隊ではない。そのことが暗に非難されているようで、信行は思わず顔をふせたものだ。だからといって、すこしも恥ずることはないのだ。信行

の父がかるいびっこをひくそもそもの原因は、日支事変による名誉の負傷なのだから。
だしぬけに一夫が調子っぱずれの大声でうたいだした。

「キンシかがやく十五銭
はえあるヒカリ三十銭
ホウヨク高い五十銭
紀元は二六〇〇年
ああ一億の胸いたむ」

これは、紀元二六〇〇年（西暦一九四〇年）を記念してつくられた歌のかえ歌であって、「キンシ」「ヒカリ」「ホウヨク」は、いずれもたばこの名まえである。
信行はぎょうてんした。いくら人通りがないとはいえ、暗に政府を攻撃したようなこの歌はひどすぎる。
「いけないよ。だれかきいたらどうする。」
一夫は、ますます声をはりあげておなじ歌をくりかえした。

「よせよ、警察や憲兵にきかれたらたいへんだ。」
「なあに、こちらには陸軍大佐殿がついている。なあ、美佐ちゃん。」
おわりのほうは、多分に美佐へのこびが感じられる口調だった。
「わたし？　わたしなら、べつにかまわないけど。だけど、音程がくるっていて、ききよいものじゃないわね。」
美佐は、にこりともせずにそういった。
「腹がへったなあ。だれか金を持たんか。」
一夫はいつまでも一つことにこだわってはいない。がらりと態度をかえて、あなだらけの手ぶくろをぬっとさし出した。
「どうするの。」
美佐は、およそ女の子らしからぬ直線的なまゆをしかめてふりかえった。
「なにか買おう。こう腹がへっちゃ一歩もあるけん。」
「そう。それじゃ、五銭出すわよ。」
「信ちゃんは？」
「だめだめ。坂田先生からいわれたろう。『武士は食わねど高ようじ』」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「金を持っているのか、いないのか、どっちだ？『腹がへってはいくさができぬ』ということわざもあるんだぞ。」

「それが、一銭きりしかないんだよ。」

信行はしようことなしにがま口をひらいた。なけなしの一銭銅貨が、一夫の手ぶくろにポトリとかわいた音をたてた。

「『けだし人には五厘あり』か。だけど、おれさまにはいま六銭がある。」

一夫はとくいげにぺっぺっとつばをはいた。

坂田先生は、このところ吉田松陰の「士規七則」をそらんじさせていた。その第一項はこうだ。

「一つ、およそ生まれて人たらば、よろしく人の禽獣に異なるゆえんを知るべし。けだし、人には五倫あり。しこうして君臣父子をもっとも大なりとなす。ゆえに人の人たるゆえんは忠孝を基となす。」

すなわち、一夫は、「五倫（五つの道。父子、君臣、夫婦、長幼、朋友）」を「五厘（一銭のはんぶんの価格）」ともじったわけだ。

信行はふゆかいだった。先生のことばを平気でわらいぐさにする一夫をゆるせなかった。それに、ふたりからは金をまきあげておきながら、じぶんは一銭も出してはいない。

が、正面きってとがめるだけの勇気が信行にはなかった。

一夫は、とある一軒の、細めにひらいている板戸をひいた。黒布をおおった電燈が一つ、がらんとした土間にせまい輪をおとしていた。

一夫は、ぐるりとうす暗い店内を見まわしたのち、おもむろにいった。

「ふをください。」

買いもとめた三本のふを、一夫は一本ずつくばった。

「食べられるの?」

「ぜいたくは敵だ。」

一夫が、坂田先生の口まねでこたえると、美佐はころころとわらった。

「あんがいいいことをいうのね、一夫君は。」

一夫は、ちょっと顔をあからめ、そのことをつくろうかのように、ふをまるごと口にいれた。信行もおずおずとふの一片を口にした。ぱさぱさしていて、いっこうに食物らしい感がなく、腹のたしにはなりそうもない。

美佐は、ものめずらしそうにふたりをながめているだけで、ついにふを口にしなかった。

「食べないのか。もったいない。」

「一夫君はおいしそうね。だけど、信ちゃんはまずそうよ。じゃ、これ、一夫君にあげる。」

「うん、ありがとう。」
一夫は、いぬのように、美佐の手にあるふを口でもぎとった。
「ふなんか食べて、まるでこいみたい。」
「こいが食べるんだろう、どくはないよ。」
「だったら、あなたはみみずを食べる?」
一夫は思いがけぬ逆襲に、のみこみかけたふをのどにからませて、しばらくのあいだ目を白黒させていたが、意地で声をはりあげた。
「うん、食うさ。みみずの黒焼き寝小便の薬。」
「まあ。小さいころたくさん食べたんでしょう。」
美佐はきゃっきゃっとわらって、一夫の背を思いきりぶった。
「やったな。ようし、女のくせになまいきだぞ。」
一夫が、こぶしをふりあげると、美佐は横っとびにとんでかわし、スキップしながらにげた。
「ここまでおいで、あま酒進上。」
「ようし。」
子いぬがじゃれるようにしてふたりがやみにすいこまれると、信行はいたたまれぬ孤独感にとらわ

れた。
干し魚を焼くこうばしいにおいが鼻をついた。とたんに、なぜとも知れず信行はなみだがこみあげてくるのを感じた。
大通りを横ぎると人家がちょっととだえて、馬ふんくさい夜風がひとしお身にしみる。
久留米は軍都である。日中であると、ゆきかう軍馬のふんが道のいたるところに見られるのだが、いまはすっぽりと暗がりの底にしずんでいる。
馬ふんをふんづけないためには、道のはしを通るがいい。が、かえってじゃりに足をとられてまずい結果におちいる。信行は、いつか地雷をさけて通る兵士のような真剣さであるいた。そうすることが、信行にさしあたりの目標をあたえ、めいりがちな気もまぎれるのだった。
ひいらぎの花があまくにおった。生け垣を右にまがると、家は近い。そのとき、
「わっ。」
と、とび出した者がいる。瞬間、ぎくっとして立ちすくむ信行に、快活なわらいがふりそそいだ。
「ちゃあんと知っていたよ。」
平静をよそおいながらいう信行に、ふたりはつまらなさそうに、
「なんだ、もっとびっくりするかと思った。」

「声が小さくてききめがなかったのよ。ねえ。」
信行は、
「それくらいのことに、びっくりしてたまるか。戦地の兵隊さんを思え。」
と、からいばりしてみせた。そのじつ、まだ心臓の鼓動がしずまらないでいる。
「ふん。体操もできんくせに。」
一夫が、ばかにしたようにいった。信行にとってもっともいたいところである。
信行は、すべての教科にすぐれていた。とりわけ、算数ともなると、答えを直観的にだすことができる。その解答があまりにも早すぎて、かえって学級全体の学習のブレーキになると見てとった坂田先生は、算数の時間になると、信行に問題を板書させ、じぶんは個別指導にあたることにした。板書がすんでかなりおくれて席にもどっても、まだ信行は、かれと一、二位をあらそう美佐をすら追いあげることができる。
だが、信行は、いままでに、学級担任によって任命される級長の地位についたことがない。信行は、体操がからきしだめなのだ。懸垂はただの一回もできないし、とび箱はとばないさきから足がすくむ。
なぜそうなったのか、信行にも思いあたることがある。三年生のとき、低鉄棒の前方回転で、から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com